

生涯学習を目的とする大学図書館ボランティアの現状 筑波大学附属図書館の事例を中心に

辺見 知代

本研究は、高等教育機関における生涯学習の機会の提供について、大学図書館における生涯学習を目的としたボランティアに着目し、実態を明らかにすることを目的としている。事例として、筑波大学附属図書館ボランティアを取り上げ、生涯学習を目的とした大学図書館ボランティアの現状を探った。研究方法は、(1)文献調査、(2)筑波大学附属図書館ボランティア全 50 名を対象とした質問紙調査(回収率 76%)、(3)筑波大学附属図書館ボランティア 6 名及び筑波大学附属図書館職員 1 名を対象としたインタビュー調査である。

本研究においては、“生涯学習”を「一生涯の中で、自発的意思に基づき、自ら適切な手段・方法を選択して知識・技術・態度を学習すること」、 “ボランティア”を「自発的意思に基づいて、活動への対価を求めずに、公共社会に貢献する人や活動」とそれぞれ定義した。また、生涯学習とボランティアの関連については、1992 年の生涯学習審議会答申『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』の中で述べられた「生涯学習とボランティアの関連を捉える 3 つの視点」(「自己開発・自己実現につながる生涯学習」、「ボランティア活動のための生涯学習」、「人々の生涯学習支援」)を取り上げ考察した。また図書館における生涯学習とボランティアがどのように捉えられているかについても確認した。

生涯学習を目的とする大学図書館ボランティアの現状を明らかにするため、大学図書館の機能・役割を明らかにし、生涯学習を目的とする大学図書館ボランティアの事例について文献調査を行った。その中から、大学図書館ボランティアを最初に導入した筑波大学附属図書館ボランティアに焦点をあて、質問紙調査及びインタビュー調査を行った。併せて、「生涯学習とボランティア活動の関連を捉える 3 つの視点」をもとに、筑波大学附属図書館ボランティアにおける生涯学習の捉え方を考察した。

質問紙調査及びインタビュー調査によれば、筑波大学附属図書館ボランティアにおける生涯学習の捉え方はボランティア個々によって大きく異なっていることが明らかになった。半数以上のボランティアは生涯学習を意識していたが、筑波大学附属図書館ボランティアの活動は生涯学習になっていないと考えるボランティアもいた。一方、筑波大学附属図書館職員は、筑波大学附属図書館ボランティアの活動を「ボランティア活動のための生涯学習」及び「自己開発・自己実現につながる生涯学習」と捉えているが、同じ捉え方をしたボランティアは 15%(5 人)にとどまった。更に、生涯学習とボランティア活動の関連について、ボランティアが考える職員の捉え方と、職員が考えるボランティア自身の捉え方の認識にも差があった。生涯学習を目的とした大学図書館ボランティアを導入・継続するならば、準備・改善すべきことの 1 つとして、その大学図書館においてどのように生涯学習を捉えているのかを定めておく必要があるのではないだろうか。

(指導教員 呑海沙織)